高崎高校図書館インフォメーション

No Book No Life

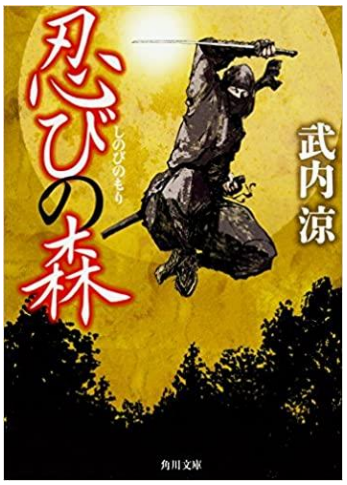
No.3／2021 年 6 月

《翠巒文庫》

《翠巒文庫とは》

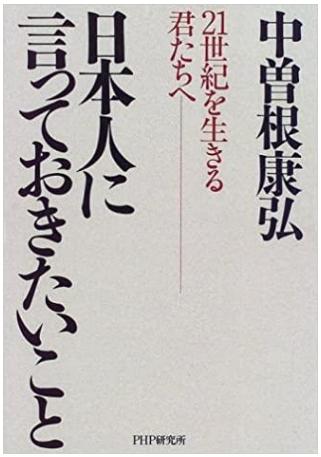
皆さんは「翠巒文庫」を知っていますか？翠巒文庫とは、高崎高校ＯＢの方が、自身の書いた本を「是非高高生にも読んで欲しい」という思いの下寄贈してくださった本によって構成されている高崎高校が持つ特有の文庫のことです。翠巒文庫は図書館に入って直ぐにあるライトノベルの本棚の裏にあります。

『忍びの森』武内涼 著（角川文庫）



この本は歴史時代作家である武内涼さんが第 17 回日本ホラー小説大賞の最終候補となった作品を改題・改稿して作られたデビュー作品となっています。織田の軍に妻子を殺された忍びが主人公の小説で、7人の仲間と紀州に向かう途中，荒れ寺にたどり着く。そこに棲む妖怪 vs 忍びという時代エンターテインメントとなっています。この本の特徴は世界観だと思います。荒れ寺に着くまでの情景描写が細かく書かれており、それによって重厚な世界観が生み出されています。戦闘シーンに入ると雰囲気ががらりと変わりスリリングな部分が目立つようになりサクサクと読み進めることが出来ます。読み応えのある本だと思うので読書用の時間が長く取れる時に是非読んでみてください。

『日本人に言っておきたいこと』中曽根康弘 著



この本は本校の第35期生である元内閣総理大臣の中曽根康弘さんが書いた本です。伝統の基づく日本国の礎が壊れつつある今、我々は何を支えに 21 世紀を行くべきか。政治、経済、福祉、外交および安全保障、教育等の各部門において、現在の課題を指摘し、進むべき方向について書かれています。近い将来日本の未来を担うであろう高高生には一度は読んで欲しい本だと思います。

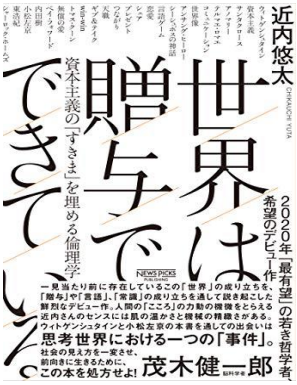
《図書館を利用しよう！》

皆さん、図書館を利用していますか？高崎市立図書館などの公共図書館では予約 100 人待ちなどという人気の本が、実は高高の図書館で誰にも借りられずに配架されていたりします。例えば東野圭吾や村上春樹の新刊も、さほど待たずに普通に借りられます。もし、皆さんに興味がないのならば、家族のために本を借りてゆくというのはどうでしょうか。家に帰ってこの状況を是非家族方々に伝えてみてください。「何か読みたい本があれば俺が借りてきてあげるよ」。こんなかたちの親孝行もありだと思います。

AKIRA の 1 冊

『世界は贈与でできている～資本主義の「すきま」を埋める倫理学』

近内悠太 著（NewsPicksパブリッシング）



この図書館だよりで私が斎藤幸平『人新世の「資本論」』（集英社新書）を紹介したのが今年の１月。本はいまだに売れ続け、彼は今ではすっかり有名人だが、ついに３学年６月の共通テスト模試にも取り上げられてしまった。もっとびっくりしたのは、同じ模試の第５問、選択問題の現代文では、今日紹介するこの本から出題されていたことだ。ちなみにこの『世界は～』は、今年３月に群馬県の高校入試にも出題されている。（かなり簡単な箇所ではあるが…）１年生、覚えているか？

斎藤氏と同世代の近内悠太という筆者は、新進気鋭の哲学者だが、どうやら加藤典洋氏の弟子筋らしい。資本主義の隙間には気づかれない数々の見返りを期待しない「贈与」があり（それは往々にして昨今流行のエッセンシャル・ワーカーに負うところが大きいのだが…)、その「贈与」はまた気づかれずに連鎖してゆくべきものである。そんな彼の主張に、何よりも「交換」を至上とする資本主義社会に疲れた私たちは多少なりとも救われるのではないか。忌まわしき資本主義と真っ向から対峙し脱成長を提唱する斎藤氏に比べると、こちらはずいぶんと穏やかであるが、それだけにある意味現実的といえるのかもしれない。本書でも強調されていることだが、この世界は決して安定などしていない。ギリギリのところで「贈与」によって支えられることで奇跡的に成り立っているに過ぎないのだ。そのことを暴露したのが皮肉にもコロナウィルスというわけだが、この本が執筆されたのはコロナ以前だと思う。それを考えると何とも感慨深い。あわせて、こんなに若い学者の文章がすぐに模試に出題されているということにも、国語教師としては感慨深い。小林秀雄や唐木順三などは過去の遺物となってしまうのだろうか…。（国語科　渡辺彰）

☆☆☆高高の図書館にあります☆☆☆

《おねがい》最近図書室の本を返すのが遅い生徒が見受けられます。図書室の貸し出し期日は守りましょう！

6 月中に発行できなかったことを心よりおわび申し上げます。（編集：3415 木村）